

海の誕生

海は人類にとって原初的な体験であることは、最古の文明とされるスメール人が、内陸民であるのに最初に存在したのが海であると語ることからうかがえる。大地の神エンキを生んだのが原初大海を表すナム女神であった。スメールに続くアッカド人の神話では淡水のアプスーと海の塩水ティアマトが交わつて神々が生まれるとする。海が大地に絶えず生命の根源を与えるとされるのだ。

生命の根源の海の観念はインドの乳海攪拌の神話にも見いだせる。インドラ神とアスラ神群との争いに端を発してヴィシュヌ神が乳海に甘露をまぜて、そこから月や牝牛、あるいは神々はさまざまな動物、鉱物、あるいは道具が生まれるのである。この海を攪拌する様は日本神話のイザナキ・イザナミが陸のない海をアマノスボコでかき混ぜると、そのしたたりから最初のオノゴロ島が出来ると対比される。海は生命発生の根源であり、同時に太陽からのエネルギーを地球上に拡散させ、まさに生命維持するための「ブルーエンジン」だったからである（チエルスキ、2024）。

海の謎は塩辛いことであり、その理由が海は死んだ神の血あるいは汗から生まれたという観念がある。北欧神話のエッダでは

ポリネシアのマオリ神話にはよく似た、天地の神であり天地分離型神話で語られるランギとパバがいる。日本神話の天神イザナキと地母神イザナミが火の神カグツチを生んだとき女神が死んだとするのが天地分離であるという説もある。オーケーアノスは万物の起源、世界を取り巻く海（水）の象徴であり、大地はその中に浮いていたとされるが、浮かぶ島という概念はユーラシア大陸の北部、さらに東シナ海沿岸（琉球、朝鮮、中国東部）に分布し、ポリネシア、そして日本列島の民話にもその痕跡が見られる。

海は宇宙、宇宙は海

ポリネシア人のような海洋バイオニアにとって天理分離あるいは「低い天の押し上げ」モチーフは天と水平線が合一する海の彼方に向かって航海をする民のイメージを表現したものだ（後藤、2009）。彼らは視界の外にある遠い島を目指し、風向、うねり、鳥、天体などさまざまな自然現象をたよりに目的地にたどり着いた。その中でも出現・没入時の星座の角度はもともと重要な要素、スターナビゲーションであった。彼らの天体に関する神話は単なる物語ではなく、航海術という実践的な知識と密接な関係をもっていた。ポリネシアでは「島を釣り上げる」という神話がある。島の天頂を通る星を頼りに航海すると次第にその



価値の再発見④

海の神話

後藤 明（南山大学人類学研究所）

キーワード 創世神話、海の起源、外来王、航海術、津波、天文学

原古の巨人が殺されその死体の各部分から世界ができたとき、海は血液から生まれた。ニューギニアのアラベシユでは女がサトウキビの葉で指を切ったので穴を掘って血をためたが、あふれて海となった。ポリネシアのソサエティ諸島では創世の神タンガロアは島

星は高くなり、やがて水平線に島が現れる。まるで星が島を釣り上げたように見えるのである。

ポリネシアの天文航海術では水平線の決まった場所から登る星座は方位の指標であった。彼らはその位置をポリネシア語でアナ（＝穴の意味）と表現した。さらにタヒチ語では星座はルア（＝筒）を通じて東西を移動すると考えた。そして次々と指標になる星が南中したときの高さで自分のいる南北の位置（緯度）を推測した。北半球なら北極星、南半球でも南中したとき天の真南を向く南十字星の高さも緯度によって異なるので移動の指標とした（後藤、2024a・2025）。

そのような航海術を伝えるタヒチには星座どうしが交合して星を生み、その星が空を航海してまた別の星を妻として子供を産むという星生み神話がある。星生み神話ではまず男性原理と女性原理を表す神が交わって、太陽や月あるいは流星のような天体を生んでいく。生まれた星の一つが天空を航海して別の星と交わり、さらに星を生んでいく。すなわち星の運行が航海の鏡像であったのだ。カヌーとされるのは金星や火星であるが、このような惑星は決まった位置関係をもった星座の間をあたかもカヌーのように「航海」する。大海原を、星を頼りに航海してきたポリネシア人たちは、星は空に写った海や島であると認識し

を造るのにあまり熱心だったので汗が地面のくぼみに溜まって海になった。また隣のマルケサス諸島では男神と交わってさまざまなものを生んだ女神は最後に破水して流れ出した羊水が海となった（大林、1993；後藤2010、2017）。

天地分離

ギリシャ・ヘシオドスの『神統記』では最初に発生したのがカオス（混沌ないし無限）であり、それから広い胸を持つガイア（大地♀）ができた。カオスとガイアからはいろいろな神が誕生したが、ガイアは星をちりばめたウーラノス（天空）を生み、ウーラノス（♂）に体を覆わせた。ガイアはまたウーラノスと交わって深く渦巻く海であるオーケーアノスなどを産んだ。オーケーアノスが「海＝オーシャン」の語源となる。

ガイアとウーラノスは強く抱擁し神々を産んでいったが、息子のひとりクロノスが鎌で上にのしかかる父ウーラノスの男根を切断し放り投げた。こうして天と地は分離した（天地分離型神話）。クロノスは支配的神となったがクロノス自身もやがて息子のゼウスに位を奪われてしまう。切断されたウーラノスの男根は泡立つ海に投げ込まれると潮に流され、白い泡が群がってその中から生まれたのが女神アフロディーテであり、ローマ神話ではウェヌス（ヴィーナス）となる。

たのはむしろ自然であった。

おわりに

ポリネシアにはプロトウあるいはハワイキといった根源の国の概念が広がる。それらは神がすむ国、祖先が来た場所、実りが到来する場所であると同時に、魂が戻っていく国でもある。南島語族世界（東南アジア島嶼部からオセアニア）では棺が船型あるいはカヌーを棺として使うことが多いが、魂がハワイキのような来世に行く場合もしばしば海を越えて航海していく（後藤、2024b）。

このように人類にとって海は異界であり、また世界刷新（例 津波による破滅）の契機でもある（後藤、2000）。そしてしばしば英雄は海を越えてやってくる（外来王の思想）。ポリネシアでは航海英雄が暗い世界から明るい世界に乗り出し、発見した島や地形に命名してゆく。これは神武の東遷の過程で事細かに地名を列挙していくさまを思い出させる。大和王権が畿内で正当性を主張するなら、最初から畿内に天神降臨すればよいのに、なぜわざわざ日向から海を越え、陸行して土着勢力を屈服させるのか？ 移動しながら土地を命名し、土着勢力を屈服させていくことは未開の地を分節し、秩序立てていく行為であるからだ（後藤、2012）。